

# につくきコロナに教えられ

山川 静夫

(芸能評論家・元NHKアナウンサー)

大阪放送局に勤務していた頃の昭和四十二年の春、「橘ノ円都」という落語家と対談し、『七草正月』という噺を聴いた。

その上方落語の枕によると、上方では正月七日の「七草」の行事として、七草粥をつくるときに唱える呪文のようなものがあることを知った。今でも続けている家庭があるかもしれない。「七草なすな、唐土の鳥が、日本の土地へ渡らぬうちに、トントンパタリ、トンパタリ、ストトンパタリ、トンパタリ……」と、七草を菜切り包丁で切るときに、主人が調子よく唱えると、うしろに並んでいる家族一同が声を揃えて、

「オテテテテ」

これで儀式がすむという。

つまり、日本では昔から「唐土」の鳥が、よくないものを運んできて、それを日本の上空でまき散らすので疫病が流行すると思われていたから、その厄払いを「七草の行事」として続けていたのだ。

唐土、つまり中国との関係が難しくなっている昨今は、こんな古風のおまじないのような慣習でも、日中外交に努力している人たちから、「けしからん」と叱られそうだ。たしかに、古くは遣唐使や遣隋使が日本から派遣され、文化面では、いろいろと良い刺激を中国からいたゞ

いたことは十分承知している。これからも仲良く付き合いたいものだ。

それはさておき、コロナは世界中に厄介な問題をまきちらし、これまでの生活習慣を変化させるほどの影響をうけたが、わが家もコロナによって気付かされたことがある。

## 山川 静夫（やまかわ・しずお）



1933年静岡市出身。国学院大学卒業後、56年NHK入局。アナウンサーとして『ひるのプレゼント』『ウルトラアイ』『邦楽番組』

担当。74年から『紅白歌合戦』白組司会を9年連続つとめる。著書は『歌右衛門の疎開』『勘三郎の天気』『人の情けの盃を』『胸の振子』など多数。近著は『歌舞伎思い出ばなし』『文楽思い出ばなし』。90年『名手名言』で日本エッセイスト・クラブ賞。

三回目の予防ワクチンを、私と共に打った女房が、半月ほど経過してから、全身に湿疹が現れた。私の体は何事もない。すぐ、かかりつけの医院で診てもらった。原因はわからないし、帯状疱疹たいじょうほうしんではないという。症状はひどくなる一方で、皮膚科の医院をたらい廻しさせられたあと、薬の関係にくわしいとされる大病院を紹介された。

診察した医師は、

「原因はわかりませんが、症状がひどいので、すぐ入院していたゞいて、じっくり治療しましょう」

と、即断され、そのまま下準備もなしに女房は入院した。

コロナが蔓延まんえんしている時期だったから、家族さえも入院患者とは面会禁止だ。結局は、四十日間も女房とは顔を合わすことなく、電話で連絡するだけで、九十歳近い男が、初めて、長期の独身生活をせねばならないハメにおち入った。

これまで、三食の食事はすべて女房にまかせきりだったから、料理は不得手だ。仕方なく電

子レンジの「チン」を活用して、コンビニの冷凍食品を主力とし、時々外食をはさんだ。しかし、親しい友人との楽しい会食はうれしいが、夕方出掛けて寂しくひとり食べるのは少しもおいしくない。

そればかりではない。毎日の洗濯、掃除、買物、風呂、ゴミ捨てもあれば、電話の応対もある。少し休んでいると宅配便のチャイムが鳴る。もうヘトヘトだ。これも今まですべて女房がひとりで処理していたことに気づき、恐れ入った。

この女房の四十日間入院は、老化した私の身体に大きなダメージを与えた。神経も疲れた。今までは、六歳下の家内に介護されることばかり考えていたが、それをくつがえしたのは皮肉にもコロナだった。老人がひとりで暮らすむずかしさを教えてくれたのである。

一番こたえたのは、夫婦の語り合いが断絶してしまうことだ。普段はたいした会話もしていないのに、いざ一人だけになると、話し相手を失ない、新聞を読んでもテレビを見ても、まったく反応のない毎日は、想像以上につらく寂し

いのだという思いを身にしみて感じたのである。

日頃、仲良くしていた友人が、悲しいかな一人ぼっちになってしまつて、それをなぐさめるときに「淋しいだろうが、頑張つてネ!」と軽く伝えていたのを思い出し、反省させられたし、老々介護の生活をしていても、二人で協力できるという、「それだけで幸せ」と感謝すべきなのである。

女房は四十日間の入院を終えて帰ってきたが、原因は「ワクチンの後遺症ではないか?」との説明ばかりで、今だにはつきりしない。全快はまだ先になりそうだが、日常の話し相手が存在することは、かけがえのない幸せである。

コロナはいつ果てるのだろうか。予防は難しく、ワクチンの効果も人それぞれだろうが、数々の苦い体験に出会つて気付いたことも一杯ある。人生は山あり川ありで、禍福はあざなえる縄の如く、交互にやつてくる。暗い面ばかり考えていても仕方ない。につくきコロナにも教えられることもある、と自らをなぐさめて、いやなマスクも我慢している昨今だ。